www.jaip.jp/ BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS No.548

日本洋書協会
JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

AUGUST 2017
会報誌 vol. 51 no. 5

Published by JAIP 1-1-13-4F, Kanda-Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051 e-mail:office@jaip.jp

東大作先生講演セミナー “PEACEBUILDING『平和構築』とメディア・出版”

NHK番組ディレクターとして華々しい成功を収められ、国連日本政府代表部に和平調停、平和構築担当の公使参事官として勤務された上智大学准教授東先生の紛争地域での体験を交えた貴重なお話を聞く事ができました。

その中で感じたことを、簡単ではございますが、共有させて頂ければと思います。

「自分達の問題として捉える、とにかく関与し続けることが重要」

東先生のNHK時代のご経歴、カナダ留学、国連公使参事官としてのお仕事、紛争地域での調査、現地を取り巻く厳しさ、そして、国際的な平和活動を支える国連、政府関係者、今後の国際社会、日本に求められる課題など、普段聞く事のできない内容をお話頂き、あっという間の1時間でした。

色々と感じたことはありましたが、中でも印象に残ったメッセージとして、「世界は一つ。自衛隊を出したり、医師を派遣したりすることは、回り回って自分たちを守ることにつながる。とにかく関与し続けることが重要」という言葉がありました。持続的な関与や支援が重要なことは、理論上理解されていても、支援する側の利益やその時々の外交状況等の要因で、平和構築活動が低速化、もしくは悪化、別の紛争を発生させることにもつながっているように見えます。そのような中、日本はこれまでの支援活動で得た世界からの信頼を活かし人間の安全保障を柱として振る舞うべき、という提言は、昨今難しさを増しているように見える国際社会において、確かに日本は唯一の被爆国、そして非戦国、平和主義国家として、紛争地域にも受け入れられやすい第三者的存在の国連を介し、平和構築に関与できる特別な存在なのかもしれないと感じました。同時に、国内でも安全保障戦略を巡る議論は色々とありますが、戦後、国際社会の中で確立してきたこの特別な存在を崩すことなく、平和構築、国際協力を継続していってほしいものだと感じました。

また、個人として自分達の問題として捉えるという点に関してですが、私自身、大学時代、国際関係のゼミに所属しており、国際協力に関するスタディツアーや活動に参加していたこともあったのですが、社会人として企業に入ってからは途上国や紛争地域の状況はメディアを通して知るレベルに留まっておりました。

今回、東先生をはじめ情熱をもって国際的な平和構築のために人生を捧げている方々のお話をお聞きし、非専門家としてもできることは何か、と考えるきっかけをあらためて与えて頂きました。

「平和構築と洋書」

今回、『平和構築』とメディア・出版というテーマでお話頂きましたが、私達が最も関わりの強い洋書と平和構築について考えてみました。

東先生のお話の中でも英語での出版が今につながる重要な役割を果たしたことが挙げられましたが、洋書は国境を越え世界をつなげるアイテムの中でも知識、情報、文化を網羅する非常に基本的な欠かすことのできない存在であることを改めて感じました。大きな理想かもしれませんが、また、簡単なことでは無いかもしれませんが、あらゆる専門家の提言がより一層洋書を通じて、世界中で交換され、平和構築に関する動きが活発化することを願います。また、逆に、将来的に国を自らリードしていく必要のある紛争地域に暮らす人々に平和に関する知識、情報を提供する存在になれるのではないかと思います。本を手にできる状況に変えていくこと自体が、大変で時間がかかることなのだとは思いますが、現地の人が何らかの形で平和の存在を知り、希望を見出す日が一日も早く来ることを願います。

また、今後も国際社会と大きく関わることになる国内の若者の間に、もっと洋書を浸透させる必要があるのではないかと思います。

東先生が教鞭をとられる上智大学は日本一国連職員を輩出しているということもあり、言うまでも無く既に国際的な環境だと思いますが、他の学校でも外国語での授業の実施や外国語教科書の採用など、国際化のスピードアップを図る必要があると感じます。

今日多くの大学が国際人の育成を唱えていますが、なかなか実情は厳しいようです。外国語を学習するだけではなく、全ての学生が外国語で学習、研究できるようなレベルになることが理想と思います。既に取り組んでいるものもございますが、質の高い外国語の教科書、書籍をご紹介するという面で、もう少し工夫ができるのかもしれないと感じました。

「最後に」

先生との懇親会も大変思い出深いものとなり、是非次の機会も楽しみにしたいと思います。立場や研究分野を越え、様々なメンバーと交流されることも厭わないと東先生ご自身仰っておりましたが、実際に懇親会の席でも非常にオープンマインドで、分け隔てなくお話頂き、大変有り難く、楽しい時間を過ごしました。
講演中、これまで研究や調査に関係された多くの方々との出会いやつながりをご紹介頂きましたが、洋書事業に携わる一員として日々の仕事の中でも、平和構築に少しでも貢献できることはないか模索していきたいと感じました。

最後に、国際社会における平和構築、また日本国内被災地復興支援における東先生のご貢献に感謝申し上げるとともに、今後の益々のご活躍をお祈りしたいと思います。

（トムソン・ロイター　石田さやか）

JAIPサマーパーティー

2017年度サマーパーティ―が去る7月14日（金）に、第一ホテル東京（新橋）にて開催されました。
参加者は27社90名と、昨年に続いての盛会となりました。
午後6時に文化厚生担当委員長の山田氏（アシェット・ジャポン）が司会進行をつとめ、文化厚生担当理事の鶴氏（東亜ブック）より開会の挨拶を頂きました。
乾杯のご発声は、新理事長のグレシャム氏（MHM）より頂きスタートしました。
若い世代からベテラン（？）の方まで幅広い層が参加し、当日は猛暑だったせいか、お酒も進み活発な情報交換の場となり、あっという間に時間が過ぎゆく会となりました。
また、仕事だけでなく、趣味を通して会社の垣根を越えた交流も多く見られました。
会の最後は、副理事長の山川氏（ユサコ）の挨拶を持って閉会となりました。

（ユサコ株式会社　山中玄致）

我が社・わが街　第10回　銀　座

株式会社教文館
上島　和彦

教文館は1885（明治18）年キリスト教の出版社・書店として創業しました。アメリカから派遣されたプロテスタント、メソジスト派の宣教師たちの働きがその母体となりました。学校・教育関係では青山学院を創ったグループです。銀座に書店を出したのは1891（明治24）年です。

1923(大正12)年関東大震災によって銀座は壊滅し、教文館も社屋を失いました。

数年前のNHKの朝の連続ドラマ「花子とアン」で原稿を抱えて、燃え盛る炎の中を逃げ惑う主人公のシーンがありましたが、モデルとなった村岡花子は数年後わが社と合併することになる興文協会の編集者でした。

帝国ホテルの設計も手掛けたフランク・ロイド・ライトの片腕、アントニン･レーモンドの設計により1933（昭和8）年に現在の社屋が完成いたしました。太平洋戦争の折には、さまざまな圧迫と危機があり、出版統制を避けるため、一時出版活動も停止したようです。1945（昭和20）年の東京大空襲によって、再び銀座が焦土となった時には、社員の必死の努力で類焼を免れたとの記録が残っています。

戦後は、一時タイム・ライフ誌の独占販売権を入手したことなどによって好調な滑り出しをし、またオックスフォード英語辞典を英米本国以外で最も販売した書店として、イギリス本社から表敬訪問も受けているようです。

しかし、その後度重なる経営の危機、試練もあり、それらをくぐり抜けて、事業を継続し、現在では一般書籍売場（1、2階)、「子どもの本のみせナルニア国」（6階)、カード･グッズ類を扱う「エインカレム」（4階)、「Café きょうぶんかん」（4階）など、多層階に店舗を展開しております。

わが洋書部は1997年に7階から5階へ、2015年1月からは3階キリスト教書店の奥に、店舗・事務所を移しています。創業以来の精神としてのキリスト教関連書籍の他、その周辺世界、ギリシャ・ローマの西洋古典学関連の書籍、古代・中世哲学や歴史、ユダヤ教、イスラム教などの宗教書、中近東・オリエント学などを取り扱っています。

最近の銀座の街は、新しい大型商業施設の建設によって、ますますの活況を呈し、外国人観光客の増加、東京オリンピックを見越したホテルの建設ラッシュなどで、路線価もバブル期を超えたとの報道がありました。この街全体についての俯瞰は出来かねますし、また本欄に期待されている飲食店の紹介についても、夥しい情報が溢れていますので、ここでは弊社4階にある喫茶室「Café きょうぶんかん」を紹介させていただきます。

かつて、昭和の初期には、弊社1階、地下1階に「富士アイス」という評判のパーラー / レストランが入っており、作家の永井荷風も会合する際の拠点として愛用していました。また同じ1階にはブラジルコーヒーの宣伝部があり、そこには藤田嗣治の大壁画「大地」が掲げられていました。しかしそれらが閉店した後には、長らく弊社内には（一時資生堂パーラーの仮店舗がありましたが)、本との出会い、また銀ブラの途中に足を止めて休憩の出来る空間がありませんでした。こうした中、2004年「Café きょうぶんかん」が誕生いたしました。土曜、日曜など、銀座の喫茶店はどこも超満員で、空席を見つけるのも困難な中、オリンピックのメダリストたちもパレードをした、銀座中央通りを眺めながら、ゆっくりと美味しいコーヒーをお手頃価格で楽しむことができます。クリスマス時期の焼き菓子シュトーレンやホットワインもお薦めですが、暑い今の季節、隠れた逸品はビールです。キリスト教をルーツとした会社でビール！と意外に思われる方もいるかもしれませんが、これらはシメイビールというベルギーの修道院で製造されたビールです。

日本にキリスト教が入ってくる過程で、アメリカの禁酒法時代の影響を強く受けたグループもあったため、信者はアルコールを飲まないというイメージをもたれがちですが、実はあの宗教改革者マルティン・ルターも、（今年西洋美術館で展示された、クラナッハの肖像画の固いイメージにそぐわず）ビールを愛飲していました。

今年はルターが古い教会の腐敗を弾劾し、宗教改革を始めてからちょうど500周年、ドイツを中心に欧米の各地で記念の行事がもたれております。アメリカを経由して遠く日本にまで辿り着き、弊社の源流の一つとなって今も流れ続けている、この大きな「波」について、教文館内でも6月に一週間の連続講演を開催したところでした。会社の存立の意味を今一度心に刻み、先人たちの労苦に感謝しつつ、もう一つの良き伝統、同僚、友人、また協会の皆様方とも楽しくジョッキを酌み交わして、語らい合うことも大切にしていきたいものです。

GALE
CENGAGE Learning®

START AT THE SOURCE.

No other resource gives you more insights from more perspectives. When you explore Gale Primary Sources, you'll discover original, first-hand content — meticulously cross-referenced to bring the facts into focus, and the information to life in remarkable new ways.

Gale Primary Sources

日本洋書協会会報　vol.51　No.5（通算548号）　発行日2016年8月1日　編集者　遠藤　尚子

発行所　日本洋書協会　〒101−0051 東京都千代田区神田神保町1-1-13 ㈱MHM内　TEL 03-3518-9631　FAX 03-3518-9523
URL:http://www.jaip.jp　E-mail:office@jaip.jp